

チンパンジーと言葉

チンパンジーは、人間に次いで知能の高い動物である。このチンパンジーに言葉を覚えさせようと努力した学者が、アメリカには多く輩出されてゐる。

心理学者ウインスロップ・ケログ博士は一九三一年、生後七か月半の雌のチンパンジーの赤ちゃんに、グアといふ名前を付け、生後十か月の息子ドナルドと、兄妹のやうにして一緒に育ててゐる。然し、全く同じやうに育てたのにも関はず、ドナルドが言葉を覚えて話すやうになっても、グアは全く言葉を覚えず、この実験は一年ほどで終ってしまった。

それから十年ほど経って、ケログ夫妻と仲間の心理学者であったキース・ヘイズとキャシー・ヘイズが、ヴィッキーと名付けたチンパンジーを、やはり自分の子と一緒に育てた。ヘイズ夫妻は、四年間にわたって育て、その結果、「ヴィッキーは、“パパ・ママ・カップ”の三つの言葉を覚えて、それが言へるやうになった」と、報告してゐる。然し、“パパ”も“ママ”も、夫妻を意味する言葉として使はれたものではなく、“カップ”もカップそのものを指して言つてゐるとは断定できない節があつたやうで、これを果して「言葉」と言へるかどうかには疑問があるとされ

てゐる。

また、この頃、チンパンジーに手話によるコミュニケーションを教へることを試みた学者があつた。ネバタ大学のベアトリック・ガードナー教授と、その夫のアレンである。最初の十か月に覚えた語彙は十語であつたが、四歳頃までには八十五語に達し、これらを組合せた簡単な会話が出来るやうになつた、と報告されてゐる。

一九八七年、ペンシルヴァニア大学のデイヴィッド・プリマック教授が、重度の障害児に教へるために開発した、プラスチック製の図形文字を、サラと名付けたチンパンジーに夫人のアンが教へて、これを学習させることに成功した。これについては、「アメリカン・サイエンス」誌に詳しく報告されてゐる。私は、一九七三年にアメリカに行った時、その記録映画を観る機会を得たが、「チンパンジーは漢字なら覚えられるのではないか」と思ひ、その実験が出来たらと思つたものである。

プリマック夫妻が使つた図形文字は、特定の形と色をしたプラスチックの薄片で、裏に磁石が着いてゐて、鉄製の黒板に吸ひ着くやうに作られたものである。六歳から十歳頃まで五年間に亘つて学習した結果、数十の単語を覚え、これを英語の語法に従つて並べて簡単な文章が作られるやうになつた。例へば、夫妻が「リンゴとバナナのどちらがほしいか？」と文字を並べると、それを見て、「私はバナナがほしい」と文字

を並べて答へることが出来るようになったのである。

その後、アトランタのヤーキーズ研究所のデュアン・ランボー博士が、ラナと名づけられたチンパンジーに、タイプライターのキーを打つことによって、サラが学習したのと同じやうな視覚言語と言ふべき符号が掲示される学習機械を作り、これを操作して人間とのコミュニケーションに成功したことが報告されてゐる。

これらの実験を通して、チンパンジーは、聴覚言語は覚えることが出来ないけれども、視覚言語は覚えることが出来る、といふことが出来る。と言ふことは、「視覚言語の方が聴覚言語よりも覚え易い」といふ事であり、「漢字は言葉よりも覚え易い」といふ事を示唆してゐると思ふ。